

高知地学研究会会報

平成11年3月12日発行

第13号

● 平成11年度高知地学研究会総会のご案内 ●

下記の要領で平成11年度高知地学研究会総会を開催いたします。皆さんお誘い合わせのうえ、是非ご参加ください。なお、当日、11年度会費を申し受けますので、よろしくお願いいたします。

1. 日時：平成11年3月22日（月）振替休日 午後1時00分～3時30分
2. 場所：高知大学理学部1号館
3. 議題：①平成10年度決算報告 ②平成10年度活動報告 ③平成11・12年度役員改選
④平成11年度活動方針 ⑤その他
4. 講演

演題：「四国はどのようにしてできたか」高知大学名誉教授

高知職業能力開発短期大学校校長 鈴木 堯士先生

● 第10回野外見学会のご案内 ● 吾川村の地質

南 寿宏

第10回の野外見学会は、吾川村の地質を取り上げます。

吾川村は、秩父累帯北帯に位置します。三波川帯に近く、岩石は弱い三波川変成作用を受けております。また、四国の成り立ちを考える上で避けて通れないナップ構造も中津山で観察されます。磯崎・板谷(1991)によると、ナップの年代は179—233Ma(Maは100万年)、下位の地質体は117—134Maと、明らかに上位が古くなっています。これらは白雲母のカリウム・アルゴン年代です。前述のように、この地帯は弱い変成作用を受けていますが、放射年代が変成年代よりも古いことから、変成作用の最高温度は白雲母の閉止温度の350℃よりも低いと推定されます。

頭の柔軟体操 9

「I氏の職場で人事異動があり、男性職員2名にかわって女性職員が配置された。「よし、あと1人で女性100%だ。」とI氏はご満悦であるが、こんなことがあり得るのだろうか。

(ピー ピー もっと分かりやすくせよ)

ところで、この年代は予想よりも若干若く、中新世の貫入岩により鉱物中のアルゴンが一部流出し、岩石が若返った可能性があります。中新世の貫入岩とは、12—15Maに噴出したものであり、四国各地（足摺・室戸・吾北・屋島・石鎚等）で観察できます。当地には珪長質火成岩の岩脈が貫入しておりますし、中津山産のコノドント化石のCAIが5と、他地域（3～4）よりも高くなっております。CAIとは、熱による色調の変化の指標であり、……

(ピー ピー ピー ピー ピー 専門すぎる 専門すぎる 簡潔に 簡潔に)

(おっと、いけない。) 磯崎・板谷(1991)が本地域を黒瀬川地帯の構成要因の一つとみなしていることを記して、次にいきましょう。

目的地の仁淀川河原には、海底火山噴出物である枕状溶岩があります。また、ペルム紀の石灰岩が三疊紀の頁岩中にオリストリスとして存在し、前者にはフズリナが、後者にはモノティスが含まれます。グレイディング等の堆積構造も観察できます。西には高知市の水瓶、大渡ダムが遠望できます、確か。えっ、見えない？

近くには、温泉やレストラン（別掲、三本氏の案内参照）があり、疲れをいやすことができます。いい湯ですよ、入ってないけど。美味しいですよ、食べてないけど。

春は曙、ようよう白くなりゆく山ぎわを、紫の君と熱い想いをピクニック。

日 時：4月25日（日）午前10時30分～午後1時

集合場所：吾川郡吾川村大渡 高知県立仁淀高等学校（JR四国バス 大渡バス停下車）

解散場所：同上

備 考：集合場所は駐車場がそれほど広くありません。バスの利用をおすすめします。

JR四国バス「松山」行き南国号 高知駅前9：00発

磯崎行雄・板谷徹丸(1991)：四国中西部の黒瀬川クリッペと黒瀬川内帯起源説．地質学雑誌，vol.97，p.431-450

● 第9回野外見学会のご報告 ●

川澤 啓三

1998年11月15日（日）9時10分、奥福井バス停に集合、その数30余名。会長の挨拶のあと、吉倉先生より今日の見どころなどを中心にお話を伺う。この地域には、中生代下部白亜系や古生代のシルル・デボン系の流紋岩質凝灰岩（この中から近年放散虫化石が検出されているとのこと）が見られるし、また鴻の森北面に大規模に露出している蛇紋岩が黒瀬川亜帯（以前には秩父累帯中帯とよばれて

頭の柔軟体操 9 解答

あり得る。I氏が男性だとは、どこにも書いていない。（今は無き雑誌「Oh! FMタウンズ」からヒントを得た。）

いた)の北縁を縁どる形で分布していることから、高知市のほぼ北半分を占めて存在するこの黒瀬川亜帯の生成についてのヒントが隠されているのではと思うのである。

このルートは、古くは1930年代前半、旧制高知高校地質学教室山内信雄先生によって「高知北方のトリゴニア砂岩層(地球 25巻 p.172)」によって紹介されて以来、高知市内から近くにあるため、また宅地造成などで大規模に地表が削り取られたりして、工事中には多量の化石が産出したようで、そのおりの採集品などは平田コレクションとして残されている。最近の高知自動車道建設にあたっては、高知化石研究会会員によって収集されている。

ルート沿いでの主な観察地点は以下のとおりである。

- st-1 現地集合場所
- st-2 高知市和田ガード下の東 二枚貝Modyolus多産 物部川層群
- st-3 高知自動車道跨線橋
- st-4 化石産地物部川層群(自動車道建設当時は採集できたが、今はもう採集できない。)
- st-5 植物化石産地と礫岩
- st-6 長石質(アルコース)砂岩 灰白色長石片を多く含み、この付近の中生界の下部を構成する砂岩で、ちょっと見では花崗岩と間違えやすい。
- st-7 断層破碎帯 泥岩は黒色味をおびて鱗片状となっている。
- st-8 蛇紋岩の大露頭
- st-9 角閃岩と流紋岩質凝灰岩
- st-10 流紋岩質凝灰岩
- st-11 お弁当を食べたところ
- st-12 砂岩と礫岩

予定の時刻15時より少し前にst-1へ戻り、晩秋の野山を歩いた快い汗と適度な疲れを感じた一日であった。次回を約して、一同それぞれの帰途についた。

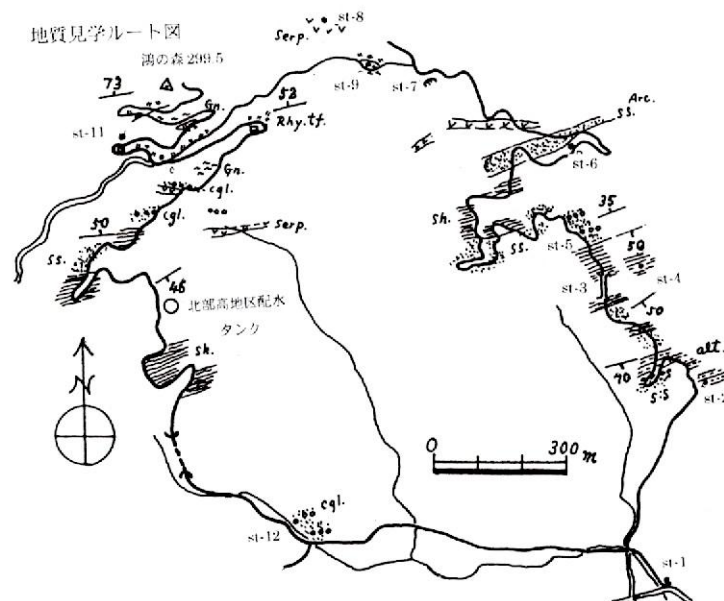


図1 鴻の森ルートマップ(川澤原図)



街角の地質博物館

朝峯神社の女陰石（層状チャート）

吉倉 紳一

朝峯神社は高知市介良の通称介良富士（別名は小富士）の麓にある神社である（次頁地図参照）。同神社の創建年代や縁起の詳細は不明であるが、三代実録に貞観8年（866年）6月土佐国朝峯神社が従五位下から従五位上になったと記されていることや、延喜7年（907年）～延長5年（927年）に編纂された延喜式に土佐国21社（延喜式21社）の一つとしての記述があることなどから、千年以上の歴史を持つ古社であることがわかっている。祭神は後述の木花佐久夜毘売（木花開耶姫）、御神体は鏡である。しかし、同神社の御神体はもう一つある。それが今回紹介する女陰石で、「甕の巖屋」ともよばれる。

女陰石は、本殿裏の褶曲した層状チャートからなる崖が、高さ約10m・底辺約5mの三角形にえぐられたもので、中央部にある割れ目から清水が湧き出している。チャートは風化表面では淡褐色～灰白色を呈するが、新鮮な内部は黒灰色で、単層（1枚の地層）の厚さは5～10cmである。清水が湧き出る割れ目は幅数cmの破碎帯で、粘土化している。

同神社には次のような古い言い伝えが残っているという。絶世の美女であった木花佐久夜毘売（木花開耶姫）は、この地で一夜にして天津彦彦火迹々岐命の子を宿し、3人の御子を安らかにお産みになった。そして、その御子の誕生を狭名田という田の稲で酒を醸して祝われたという。「甕の巖屋」の名前は清水を受ける甕（瓶）が置かれていたことと、カメは嘔むの意で、かつて酒は人間（もっぱら若い女性）が口内で蒸した米を嘔み、それをカメに溜めて酒を造った（唾液に含まれる酵素によって米のでんぷんを糖化し、それをカビの働きで醗酵させて酒にした）ことに由来するといわれている。今でも女房のことを“カミさん”というのは、かつて米を嘔み酒を造る役目を果たしていた女性（妻）の呼称のなごりである。

同神社にまつわるもう一つの言い伝えがある。木花佐久夜毘売（姫）はもともと南国市の瓶岩に祭られていたが、ガマガエルがお神酒の入った瓶をひっくり返してしまったことに憤り、この地にやってこられたという。お神酒の入った瓶は下の谷川にさかさまに落ち、岩となった。以後、その岩を瓶岩、またその谷川を瓶岩川と呼ぶようになったとのことである。

「甕の巖屋」の形が女性器を思わせることや上述の伝承から、いつしか同神社は安産、子授け、酒造りの神として崇められるようになった。今でも、地酒会社が毎年その年初めて酒を造る時には、この御神体から溢れる清水を汲み、奉納する神事を執り行うそうである。もちろん安産や子授けを祈願する人も多いとのことである。どうやら御利益は大いにあるらしい。その証拠は本殿に向かって右にある

る高さ1m余りの男根石である。これは結婚後永らく子宝に恵まれなかった夫婦が、朝峯神社に祈願したおかげで11年後にようやく男の子が授かったことに感謝して奉納したものという。ただし、残念ながらこれは天然の岩石ではなく、コンクリート製である。また、近くの石碑には歌人島田薫明氏が詠んだ「真清水や 女体に似たる 岩のあい」の句が刻まれている。

チャートは極めて細粒の珪質（ SiO_2 シリカに成分に富む）堆積岩で、産状によって塊状チャートと層状チャートに区分される。前者は無層理塊状で数m～十数mの厚い地層をなし、後者は厚さ数cm～十数cmのチャート層が何枚も成層し、各層の間に泥質の薄層が挟まれることがある。層状チャートは、放散虫、珪藻、海面骨針などの珪質微化石堆積物が固結したもので、陸源碎屑物をまったく含まないことから深海底で形成されたものとされる。1970年代からチャートに含まれる放散虫化石による年代決定が行われるようになり、それまで日本各地に広く分布し、古生代と信じられていた地層の多くが中生代の三畳紀やジュラ紀のものであることが明らかになり、日本の地質やその成り立ちについての理解や解釈に変更を迫られることになった。これを“放散虫革命”と呼ぶ人もいる。高知県内には、石炭紀、二畳紀、三畳紀、ジュラ紀、白亜紀など、さまざまな時代のチャートが広く分布する。女陰石のチャートは三宝山帯（秩父帯南帯）斗賀野層群の三畳紀のもと考えられる。チャートは細粒緻密で堅固なことから火打ち石として、また断口が鋭く貝殻状に割れることから黒曜石やサヌカイト同様、石器材料として広く用いられた。本県の遺跡からもチャート製の石斧、石槍、石斧などが出土する。

このように、朝峯神社の女陰石は地質学的のみならず、歴史的にもたいへん興味あるものである。ぜひ一度ご覧になっていただきたい。ただし、残念ながら御神体への接近は男性にのみ許され、女人禁制の聖（性？）域となっている。女性は本殿の参拝だけにしていただきたい。なお、女陰石は本殿を裏に回りこんで、チャートの階段を十数段登った所にあり、正面からは見えないので注意が必要。

朝峯神社へは土電バスの便がある。高知西武百貨店横のバス・ターミナルから「介良」行きに乗車、「北島」バス停で下車、徒歩2～3分である。駐車場があるので、車利用も可能である。

朝峯神社に関する記述には、野村宮司からいただいた同神社の案内パンフレットや、同氏にお教えいただいたことを参考にした。貴重な情報を提供していただいた野村氏に感謝する。

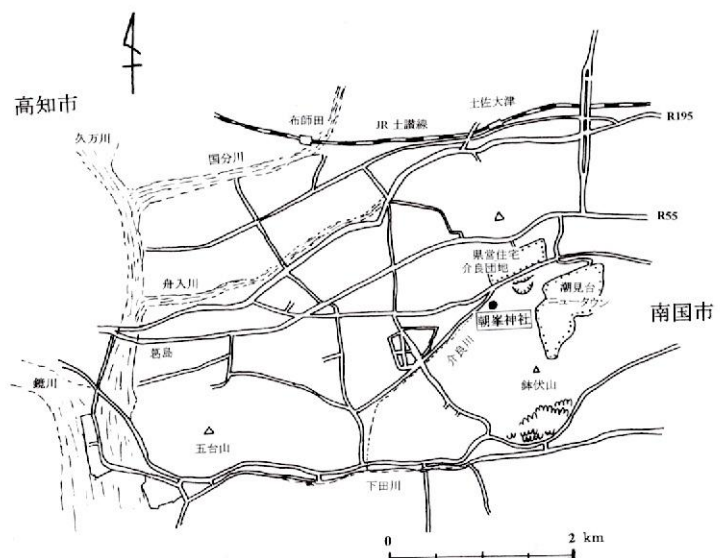


図2 朝峯神社地図

頭の柔軟体操10

高校教師のJ氏は、朝の通勤途中にすれ違う高校生の交通マナーが気になって仕方がない。しかし、違反するのは他校の生徒だけだと、ひそかに安心している。彼の考えは正しいか。

吾川村「ゆの森」の化石

三本 健二

中津溪谷の入口にある「ゆの森」は、温泉とレストランのある宿泊施設です。ここの石材の一部に化石が見られます。入浴、食事あるいは溪谷探勝のついでに御覧下さい。

ロビーから売店にかけての床には、白っぽい石材が使われています。その一部にシダ植物のような模様があり（図1）、シダ化石だと思う人がいるようです。でも、これは「しのぶ石」といって、酸化マンガンなどが岩石の割れ目に染み込んでできる模様で、化石ではありません。

レストランの入口の前では、同じ石材に貝化石が見られます（図2）。螺旋の巻き方からして、アンモナイトではないかと思いますが、殻の内部構造も見えないため、断定はできません。

はっきりしたアンモナイトは、ロビーの暖炉のまわりに使用された石灰岩に入っています。不完全な化石ですが、殻の内部にある「隔壁」という仕切りが湾曲しているようすが分かります（図3、4）。ほかに、小さいベレムナイトの断面も見られます。こうした化石や石灰岩の色あいは、高知市本町の「こうち勤労センター」の1階壁面に使われているものに似ています（本誌10号 p.4参照）。

なお、温泉の泉質は単純硫黄冷鉱泉です。

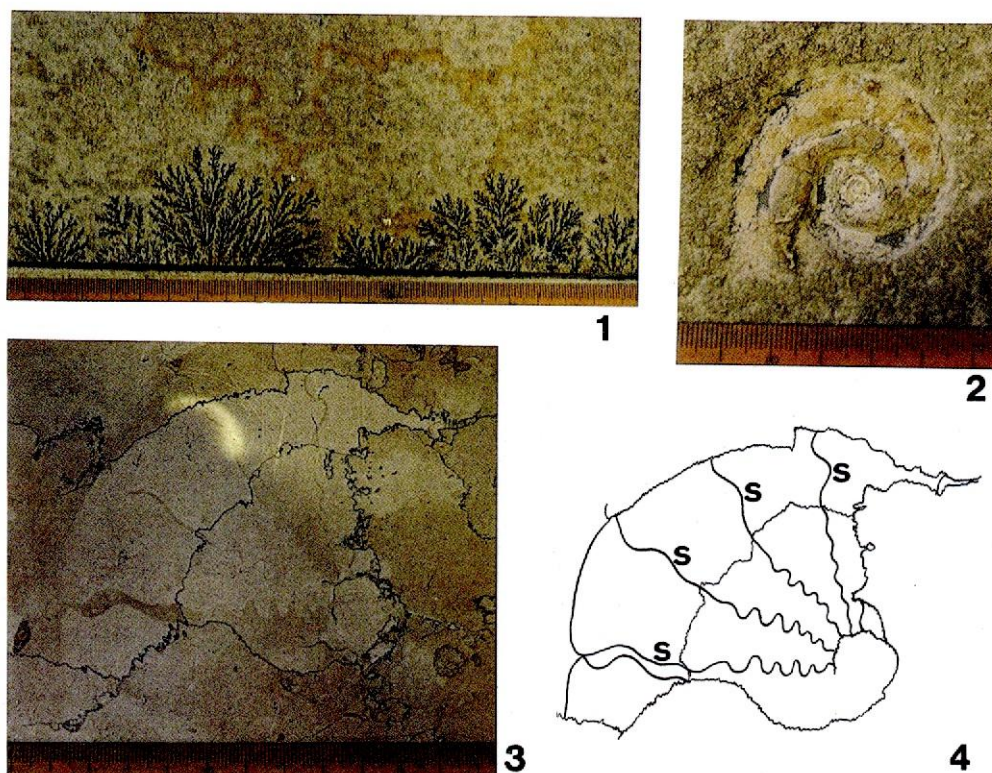


図 1：しのぶ石（非化石） 2：レストラン入口前のアンモナイト？
3、4：暖炉のそばのアンモナイト断面（sは隔壁）

頭の柔軟体操10 解答

Ｊ氏が勤務先の生徒とすれ違うことはない。同じ方向に進んでいるのだから。だから、彼の見ていないところでは、きっと……。

● 神々の黄昏 オーロラ ③ ●

川添 晃

7 再び白い大地へ

ホテルに帰ってもまだ指の感覚が戻ってこない。焼酎をコップに半分ほど飲んで冷えきった体をなだめる。睡眠はわずかに3時間、そして8時起床。気温は相変わらず-30℃。しかし天気が良いので、町の近くを散策することにした。町外れの民家には丸太で組んだログハウスが目立ち、これがすっぽりと雪で覆われている。ほとんどの家の庭にはバッテリーの充電装置があつて、これに自動車がつながれていた。時々大型のパワーショベルが動き、除雪作業が行われていた。

松林の小道に入ってみる。2本のスキーの跡が奥のほうへ続いている。林の向こうにはなだらかな岡が見え隠れしている。その先にはきっとゲレンデがあるに違いない。樹木の枝は雪の重みで垂れ下り、はるかに見上げるような大木の梢にはみごとな霧氷の花が咲いていた。道から一歩でも外れると、50cmほども足が埋もれてしまう。

今回の旅は、毎日が自由だから気楽なものである。今日の午後も特に計画は立てていなかった。スキー、犬ぞり、アイスフィッシングなどにチャレンジすることもできる。だが今回は天体観測が主目的であるから、余計な体力の消耗はさけることにした。めったに訪れることのない冬の北極圏。歩けば思わぬ収穫がある。気に入った場所でスケッチできることがとてもうれしい。しかし、明日あたりは、タクシーで思いっきりのドライブに出かけたいとも考えていた。

昼食後、ホテルのフロントに相談にいった。まず天気の前報を聞く。なんと明日は雪だと言うではないか。しかもかなり降りそうな気配である。土地の人の勘は信じたほうがよい。急遽ドライブは今日決行することにした。目指すは昨日のトナカイ牧場への道である。落日後の真っ赤な夕焼けがあまりにも強く印象に残っている。もう一度あの光景を見たい。

日本人3人を誘い、合計4人で行くことになった。タクシーの交渉をする。フロントの方がいくつか電話してくれたが、英語のわかるドライバーがとらえられない。フィンランド語しか話せないが、料金の安いタクシーならあるという。さっそくお願いすることにした。

出発は午後2時30分。50歳代の温厚な顔つきのドライバーであった。フロントの方を通じてコースと料金の交渉をする。2時間で448マルカ(11,200円)で手を打つ。ただちに真っ白に凍った 国道を時速120kmで南下する。20分もすると松林が途切れて緩やかな起伏の広い大地が展開してきた。これこそラップランドならではのすばらしい光景である。人っ気のない白い大地をただひたすらに走る。それが無性にうれしかった。ただ一つ残念なのは、昨日のあの夕焼けがない。わずかに雲間からこぼれる一筋のオレンジ色が心を慰めてくれた。30分後、国道から外れてまもなく目的のトナカイ牧場に着いた。ドライバーには時計の文字盤を指差して、30分間待ってもらうように頼んだ。ちょうどトナカイの餌付けの時間であった。ご主人と奥さんは顔を覚えてくれていて、快く写真撮影を許してくれた。

さてこれからどうするか。皆で相談の末、もっと南下することにした。10分ほど走って、“lapin quirta” という変わった喫茶店に立ち寄る。ドライバーお薦めの店であろう。しかし閉まっていたの

で再出発し、更に10分ほど走って“vuotso”というレストランに入った。コーヒー 260円。サーメ人の経営する店で、民族衣装などを展示していて雰囲気よかった。ここでおもしろいものを見つけた。レイアウト用に積み重ねてあった数十個の岩石である。一目で非常に古い時代の角セン片麻岩だと思った。英語のわかる店員がいたので懇願し、手ごろな大きさの石を4個いただいた。大収穫である。すっかり暗くなった道を引き返し、午後4時50分サーリセルカに着く。驚いたことに予想よりずいぶん早く、もう5時過ぎから雪となった。土地の天気予報を信じて今日決行したことをうれしく思ったことである。

8 雪の結晶

雪の日でも降ったり止んだりの状態であれば、一応観測に出かける。雪が降る日は気温は -15°C に上がる。こんな時は観測小屋を利用できるのでありがたい。ストーブがあって白樺の薪も十分用意されている。オーロラを見にくる観光客は日本人が圧倒的に多いらしい。小屋はそのために建ててくれたと聞かされた。この夜も7人の日本人が集まっていた。10時過ぎまで待ってみたが、晴れそうにないのであきらめて一人でホテルに帰る。

翌13日も一日中雪が降った。北極圏で雪の降りしきる光景は、眺めるだけでもいいではないか。民家の軒先を借りて3枚ほどスケッチをする。用意してきた日本向けの手紙を送るため、小さなポスト（郵便局）に立ち寄る。隣のコーナーには鍋が置かれていて、あったかそうな湯気を立てていた。セルフサービスである。早速いただくことにする。サーモンとポテトを煮込んだスープであった。多分これはフィンランドに伝わる郷土料理の一つであろう。

午後、明日のプランを考える。もう一度タクシードライブをしたい。地図のうえで、イバロのずっと北の方にイナリ湖があることを知っていた。今度は北に向かって走ろう。参加者は全部で5人。一昨日のあのドライバーがいい。ホテルのカウンターで交渉してもらった。半日コース、15,000円で決まり。

宿泊している部屋は、メインホテルから少し離れたところにある。途中で街路灯があって、やわらかいオレンジの灯りが降りしきる雪を照らしていた。降り積もった雪をよく見て驚いた。六角形の結晶がいっぱい見えるではないか。直径が1mmより大きいものもあり、成長した結晶の模様までよく見える。降ってくる雪は全部六角形である。まるで夢の世界にいるようだ。初めて見る雪の結晶、これには感動した。早速撮影する。接写用のレンズがなく、おまけに暗いとあって、カメラに収めるのにかなり苦労した。

9 北の果てへ

1月14日早朝1時、気温 -20°C 。サーリセルカ最後の夜空である。雪が止んで星がいっぱい見えていた。観測小屋へは7～8人集まってきた。5時まで頑張ったが、ついにオーロラは現れなかった。部屋に帰って休む間もなく、荷物の最終的な整理をする。7時に朝食。タクシーは7時30分に約束どおりやってきた。フロントの女性を通じて、ドライバーにコースの確認をする。特に、帰りの午後1時40分ヘルシンキ行きの飛行機には必ず間に合うよう、念を入れた。また、このコースにはロシアと

の国境行きがあったので、そこでの注意事項についてもしっかりと聞いておく必要があった。

空港のあるイバロを抜けて、真っ白に凍った国道を北に向かう。9時を過ぎても星が見えるほどの暗さである。遠くの景色はよくわからないが、なだらかな岡を上り下りして走る。すれ違う車は非常に少ない。10時、イナリに着いた。フィンランド最北の大きな湖の畔である。湖はもちろん凍りついていた。ずっと遠くの岸にぼつんと人家の灯りが見えた。しかし、人影はまったくなく、静まりかえっていた。この湖の向こうは北極のパレンツ海である。北緯69°、いま念願の北の果てに立ったのである。

10時20分、イナリを離れて南東に向かう。イバロを通過するころ、すっかり夜が明けた。国道から離れてまもなく平坦な地形が左右に見えるようになった。ドライバーが「ルットー」とつぶやくように言う。意味がわからないので首を傾げると、スピードを落としながらロードマップを差し出した。地図を見てやっとそれが川の名であることがわかった。「ルットー」と大きな声で言い返してみると、にっこり笑ってうなずいた。国境を越えてロシア側に流れている川であった。

11時30分、国境に着く。ストップ標識の向こうにしっかりとゲートがかかっていた。その向こうに警備隊の黒っぽい建物があった。「写真を撮ることはいけない。」「国境に近づくこともいけない。」と注意されていた。少し緊張する。

しかしこのドライバー、「写真はいいいよ。」とジェスチャーで教えてくれる。土地勘のある彼は全く気にする様子もない。早速記念写真を3枚撮り、手早くスケッチを一枚描く。野性のトナカイの群れが出迎えてくれた。彼らには国境がないのである。滞在時間は15分。しかしながらこれはいい体験になった。

もと来た道を、イバロに引き返す。途中で偶然大きな岩の露頭を発見した。タクシーを寄せてもらう。ほれほれするような花崗片麻岩の岩体である。ハンマーがほしい。得意のジェスチャーが通じないので、絵を描いて見せる。そうすると手をぱんと叩いて納得。薪割り用の斧を貸してくれた。雪を分けて近付き、斧の頭で岩石を叩く。よく見るとガーネット



図 含ガーネット花崗岩の露頭

トをいっぱい含んだ花崗岩であった。東隣にはロシアのコラ半島があり、35億年前の地球最古の部類に属する岩石として、高校地学の教科書に紹介されている。目の前の岩石は、盾状地を構成する20億年ほど古いミグマタイト（片麻岩と花崗岩の混在した岩石のこと）に違いない。ラップランドの旅の最後になってこんなに貴重なものが手に入るとは。同行の4人の方にも岩石の意味を説明し、お土産に持ち帰ってもらうことにした。

空港には、12時10分に着いた。午後1時40分発の飛行機に乗り、定刻どおりの3時にヘルシンキに着く。ここで一泊し、翌日の便で思い出の多いフィンランドを離れた。7泊8日、旅費22万円。すばらしい旅だったと思っている。

(完)



新刊紹介

南 寿宏

最近出版された一般対象の普及書を記す。

「恐竜文学大全」東 雅夫編 河出文庫ひ5-2 1998.10発行 950円+税

本書には、「明治の奇想天外な物語から、SFの名作、珠玉のエッセイ・短歌まで〈恐竜幻想〉のすべて」という帯コピーのとおり、恐竜に関するありとあらゆる分野の文学作品が16作品収められている。著者の顔触れが豪華である。

星 新一・豊田有恒・筒井康隆らの大家のSFがあると思えば、かの有名な幻想作家荒俣 宏がイグアノドン の復元模型の蘊蓄を傾ける。小説家で先年不慮の死を遂げた影山民夫のジュラシックパークのパロディー、物理学者の中谷宇吉郎のほのほのとした家庭のエピソード、そして文学者兼地質学者宮沢賢治の生前未発表作品。

湖水の中央に太古の怪物が浮かぶ。手早く脳を刳り出し、瀕死の友人の脳を代わりに……。1899年、アメリカの怪奇SF作品である。筆者はこの作品をじっくり読んだために、夜トイレに行けなくなってしまった。しゃくなので、あなたを道連れに。どうです、恐くなりましたか。

各作品は、会員各位にそれぞれ読んでいただくことにして、ここではそれらの中らごく一部を紹介しよう。(旧仮名遣いを新仮名に改めた。)

「雨が降り続いて、そこ一面が水浸しになり、天気がよくなってからも方々に水溜りが残った。そして砂地だから綺麗な水が椰子の雛型の葉辺りまで来ている中に、どういう訳で湧いたのか、変った形をした虫が水の底を泳ぎ廻ったり、浮き上って来て宙返りを打ったりしていて、それがどう見ても古生代の海に住んでいた、それまでは化石でしか付き合ったことがない三葉虫だった。勿論、二、三寸の深さの水溜りにいるのだから、これも大きさは尾を入れて四、五分のものだったが、草が椰子の木になれば、五分の虫も古生代の三葉虫を遥かに越えた怪物で、その甲羅の所が日光を射返す有様は、恐竜が這い回る先史時代の世界でも見られなかった壮観を呈した。」

これは、英文学者吉田健一の小説「沼」である。「沼」は1957年に発表されたものだが、アトランティスのくだりでプレート論の片鱗がうかがえるのが興味深い。1957年というのは、ウェーゲナーの大陸移動説が劇的に復活した頃である。

「あれは 恐竜のオチンチン？」

と 幼い子が指で差した。

なるほど 股のあいだから

斜め下前方へ一メートルあまり
異様に突き出たものがある。
マメンチサウルス・ホチュアネンシス。
日本の東京の
上野公園にある国立科学博物館へ
中国の四川省の合川の
楼古川にあるジュラ紀の地層から
約一億四千万年もかけて
はるばるやってきた 恐るべき珍客
巨大な化石の全骨格。
ははははは あのとんがりはね
と 父は仕入れたばかりの知識を用いる
恥骨っていう骨でね
もし オチンチンがあったとしたら
あの先っぽの下のへんじゃないかな。」
これは、詩人清岡卓行の詩「恐竜展で」である。

「頁岩とまじりあいたるよろこびに椎骨ながき陽を浴びいたり
大陸がいまだひとつでありし世に足音おもき竜生きて死ぬ
暁新世の岩棚にふるき尾を垂らし風にふかれていし異星人
凹凸のかすかにいまも陽をはじく恐竜の皮膚の他界の思い出」

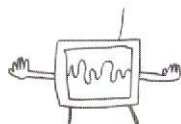
これは、歌人井辻朱美の歌集「恐竜と道化」である。この数十のファンタスティック短歌をもって
本書は終わる。

夜半にビールを友に本書を読むと、また格別である。

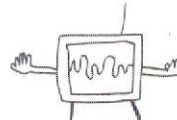
「恐竜ハイウェイ」松川正樹著 PHP新書054 1998.9発行 657円＋税

「大地震の前兆現象」弘原海清著 KAWADE夢新書S159 1998.11発行 667円＋税

「地震予知を考える」茂木清夫著 岩波新書(新赤版)595 1998.12発行 660円＋税



ニュース



今年の寺田寅彦賞に鈴木堯士先生の「四国はどのようにしてできたか」（南の風社刊）が受賞されました。おめでとうございます。

本会では、受賞記念講演を次の要領で開きます。ご参集ください。なお、当日は本会の総会にあた

1 日程 3月22日(月)午後2時～3時30分
2 会場 高知大学理学部1号館
3 演題 四国はどのようにしてできたか

[illegible]

p.16の編集後記です。

2日目、岩石プレパラートの作成です。彼女達は岩石を喜んで切断しています。その後、何時間もひたすら岩を磨く作業が続きます。0.1mm 程度まで薄くしたところでタイムオーバー。大学ではこれが4年間続くとおどかして、体験は終わりました。さて、その結果は……。

・平成11年6月6日より、本会の電話番号が変わります。

なお、総会当日、会場でも受け付けます。

中学生・高校生会費800円 小学生会費500円

賛助会員	正会員	大学生会員	中高会員	小学生会員	名誉会員	合計
3	63	2	0	3	1	72

12